

職人の技

シリーズ④ 〈庭師〉

自らが率いる「花蝶園」の

口ゴが入った大きなはしご車を軽やかに操り、現場から現場へ。小柄できゃしゃだから「無人の車が走っている、なんて言われるんですよ（笑）」。

女性の仕事としては、まだ十分に世界が開かれているわけではない造園、庭師という仕事。野村さんが、この世界で生きる、生かされる理由。

「最近では女性も増えてきましたが、独立して、弟子をとって：という人はほとんどいませんね」と野村さんが言うように、この業界で身を立っている女性は少ない。そもそも庭師の仕事は、体力勝負。石、砂利袋、木、はしご。持ち上げる時に腰を壊してしまうこともしばしば。野村さん自身、

うまく持ち上げるコツはつかんだけれど、背筋やひざへのダメージは毎日蓄積している。日焼け、手荒れ、トイレの心配。やはりここは男の世界。

「確かにそういう面もあるとは思いますが：前職が女性ばかりの職場だったので、違う世界に飛び出したいなあ、というストレスを抱えていて（笑）」

もともとは管理栄養士として病院勤務。それも準公務員といつてもいいほどの安定した待遇の中での毎日。でも息苦しさも感じていた。

「飛び出したい理由のもう一つは、職場が地下で窓がない場所だったことなんです。朝、

職場に入ると帰るまで外の世界が見えない。雨が降っているのかさえも分からない。それが無性に苦痛でした」

1日の移り変わりを感じる。野村さんは、日々の安定した立場を守るよりも大事なことだと感じ始めていた。だからこそ庭師として、景色へのこだわりは強い。もともと部屋や家を美しく飾ることに興味があった。

「インテリアコーディネーターという仕事も選択肢としてありました。でも部屋の中だけで完結するのではなく、そこから見える風景まで含めて造ってみたいからです。その中で土

野村 ゆみ さん

に触れて緑の中にいられる。これが楽しいんです」

ある時、お客様からの一言が、この道に入ってよかったという実感を与えた。

「リビングからこの庭を見て、たばこを一服。これが毎朝のリラックス法なんだよ」と言ってくれた」

まさに、狙い通り。幸せな景色を造る仕事。

「広いお庭を造るのもうれいことですし、わたし自身は坪庭のような小さなお庭を造るのも好き。条件が厳しいほど『お客様のために幸せな庭にしたい！』って燃えますね」

そのために必要なものに、広範囲な知識がある。

「材料となる砂利の種類、石や植物に、花、土、害虫、気候、薬品、造形や美術的視点に建築、左官職人的な

知識と技能：。大変ですけど、だからこそ庭造りは楽しいんです」

実績が修業期間がなければ、弟子入りも就職もできない。門前払いが続いたときに、千葉大学の園芸学部に入り直した。花屋や農家の息子たちに交じって一から勉強。そのステップも役立った。遠回りのように思えて近道。技術の吸収も

上達も、もっと楽しくしたい、もっと自分らしさを表現したい、から始まる。食欲どんぱくは誰にも負けないという自負。

「ケーキを食べていても、こ

幸せな景色を造る、
という幸せ



文=岩瀬 大二
text: Daiji Iwase

写真=岡本 成生
photo: Masao Okamoto



ここにこういう色のベリーを使うときれいになるのか」とか。会った人の服のコーディネートや配色を見ても『庭造りに生かしたいな』って、何を見ても気になっちゃうんです(笑)』

弟子も育てている。自分と花蝶園が追う夢もある。そのために、今取り組んでいるのは自身のブランド作り。

「オーセンティックな日本庭園を造ったとして、そこにワンポイントだけ花がある。隠れキヤラじゃないですけど、そこでかわいらしさを感じていただけることができました。言ってみれば、やわらかい庭。『花蝶園らしいね』と言ってくださる庭造りが目標です」



PROFILE

のむら・ゆみ
管理栄養士として病院に勤務していたが、庭師を目指し退職。千葉大学園芸学部へ社会人入学。卒業後、弟子入り、造園会社勤務を経て庭師となり、自ら代表を務める「花蝶園」を立ち上げる。海外視察や国内の異業種交流なども積極的に行いながら造園の世界を広げるとともに、数少ない女庭師として、女性誌などにもたびたび登場している。自身の活動はブログ「女庭師のお仕事日記」で公開中。